

委託事業実施内容報告書
平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(A)】

実施内容報告書

団体名：愛知県

1. 事業の概要

事業名称	地域における初期日本語教育モデル事業
事業の目的	愛知県においては、平成25年度に策定した「愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」において、「地域における日本語教室」を、「ことばや文化、国籍などのちがいがいいかわからず、すべての県民が誰でも参加でき、日本語を使ってコミュニケーションすることによって日本語の力を身につける」場と位置付けている。このような教育の場では、ボランティアと外国人県民が対等な立場で相互理解を深めるためのテーマや地域に密着したテーマなどを学ぶことで、日本語や日本社会の知識を身につけたり互いの文化的背景や考え方を理解したりすることができる。しかしながら、日本語が全くわからないか、ほとんどわからない外国人県民と最初からこうした場をボランティアがつくることは困難であり、地域の日本語教室が本来の役割を果たすためには、日本語教育の専門的な知識とノウハウを持った専門家が初期日本語教育を行い、ボランティアがコミュニケーションをとれる程度にまで日本語力を身につけてもらう必要がある。また、専門家による初期日本語教育を受けることによって、外国人県民は、簡単な日本語でコミュニケーションする方法を身につけることができるため、その後の日本語学習に効果的である。ボランティアにとっては外国人県民と日本語でコミュニケーションが容易に取れるようになるため、双方が日本語教室に参加しやすくなる。そこで、愛知県として、専門家の協力を得て、日本語をほとんど話せない外国人県民を地域のボランティアによる日本語教室へ橋渡しするための初期日本語教育の愛知モデル(あいち初期日本語教育プログラム)を構築することにより、外国人県民を地域社会の一員としてしっかり受け入れ、社会から排除されないための社会インフラ整備を目指す。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	本県の外国人は増加傾向にあり、定住化・永住化も進んでいる中、地域社会でしっかり受け入れるためには、日本語教育が必要であるが、在住外国人の日本語学習を保障する公的制度が存在しない中、日本語がわからない外国人県民に対して、初期日本語を身につけるための環境が整備されていない。地域には、ボランティアの日本語教室があるが、ボランティアだけでは限界があり、愛知県が日本語教育を専門的に進める日本語学校や研修機関、NPOなどの協力を得て、地域の日本語教室と連携した初期日本語教育を行う必要がある。
これまで日本語教育が行われていない市区町村の状況	
事業内容の概要	地域の日本語教室と連携した初期日本語教育を行う愛知モデルの構築に向け、一般社団法人DiVE.tvに委託して以下のとおりモデル的に教室を開催するとともに、人材養成や教材作成を行った。 ①初期日本語教室を合計20回開催し、日本語教育の専門家の指導の下、日本語がほとんど話せない外国人県民が、サポーターとの対話をおして、生きた日本語を学んだ。学習者が地域の日本語教室で継続して学習できるようにするため、初期日本語教室で学んだ内容や習熟度が分かるようなCan-do statementsを用意し、毎回自己評価を行った。 ②初期レベルの学習者でもサポートできるような人材を養成するため、「初期日本語教育向け指導者養成講座」を全6回開催した。6回の講座に加えて、実際に初期日本語教室でサポーターとして参加してもらい、対話型の初期日本語教育を体験を通して学んだもらった。 ③学習教材作成委員会を3回開催し、教材の内容等を検討するとともに、実際に、初期日本語教室で学習教材を使用しながら完成させた。
事業の実施期間	平成30年6月～平成31年2月（9か月間）

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	尾崎 明人	名古屋外国語大学・教授
2	衣川 隆生	名古屋大学・教授
3	磯村 美保子	(公財)名古屋YWCA・業務執行理事
4	米勢 治子	東海日本語ネットワーク・副代表
5	伊東 浄江	(特活)トルシーダ・代表
6	河村 八千子	(特活)フロンティアとよはし・理事長
7	杉山 美紀	(公財)愛知県国際交流協会・交流共生課 主任主査
8	安藤 嘉浩	一宮市教育文化生涯学習課・課長補佐
9	山端 玉環	タマキ日中ビジネスコンサルティング・代表
10	伊藤 クリスティーナ	一般社団法人DiVE.tv



【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成30年7月5日 (木) 16:00～18:00	2時間	あいち国際 プラザ 会議室A	尾崎明人、衣川隆生、磯村美保子、杉山美紀、安藤嘉浩、伊藤クリスティーナ、青木清人、各務元浩、大久保園子	1. 事業の概要説明 2. 地域における初期日本語教育モデル事業(案)の検討 3. 意見交換
2	平成30年11月27日 (火) 15:30～17:30	2時間	あいち国際 プラザ 会議室A	尾崎明人、衣川隆生、磯村美保子、米勢治子、伊東浄江、河村八千子、杉山美紀、安藤嘉浩、山端玉環、伊藤クリスティーナ、青木清人、各務元浩、大久保園子	1. 前回の議論のふりかえり 2. 取り組みの中間報告 3. 意見交換
3	平成31年2月27日 (水) 15:00～17:00	2時間	あいち国際 プラザ 会議室A	尾崎明人、衣川隆生、磯村美保子、米勢治子、河村八千子、杉山美紀、安藤嘉浩、山端玉環、伊藤クリスティーナ、大久保園子、鵜飼遥佳	1. 事業の結果報告 2. 事業の成果と今後の課題について説明 3. 事業に対する評価について説明 4. 意見交換

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	○一宮市及び一宮市国際交流協会・・・初期日本語教室の開催のため、地域の実情や外国人の状況等について情報提供していただいたり、市国際交流協会が主催する地域の拠点となる日本語教室と同じ会場を確保していただいた。また、初期日本語教室の受講者募集の際には、地域のハローワークや企業への働きかけをともに行ったり、市の窓口に来た外国人の方に、日本語教室を紹介するなど、受講者の募集に協力していただいた。 ○地域の日本語教室・・・地域の日本語教室ボランティアの内、希望者に指導者養成講座を受講してもらうとともに、初期日本語教室で受講者のサポーターとして活躍していただくことにより、継続的な学習につなげられるようにした。 ○県営住宅及び入国管理局・・・初期日本語教室のチラシの掲示や配架をしていただき、受講者募集に協力していただいた。 ○日本語教育を専門とする大学及び日本語教育専門家・・・事業実施にあたり、助言をいただくとともに、初期日本語教室での指導者、指導者養成講座の講師をになっていただいた。また、名古屋外国語大学の学生に、初期日本語教室のサポーターとして協力していただいた。 ○日本語教育専門団体・・・初期日本語教室の運営や、養成講座の開催、学習教材の作成をしていただいた。特に、担当者の方が外国人であり、初期日本語教室の受講者への継続学習への働きかけや外国人の視点を活かした教材の作成をしていただくとともに、指導者養成講座で体験を交えて話をさせていただくことにより、初期日本語教育の重要性について広く訴えかけることができた。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	○県は実施主体として、本事業全体を統括するとともに、運営委員会の開催や初期日本語教室と指導者養成講座の参加者の募集を行った。また、初期日本語教室・養成講座・教材作成の委託者の選定を行い、委託後は、委託者、コーディネーター及び関係者の調整を行いながら、事業を実施した。 ○コーディネーターは、本事業の全ての取組に関わり、事業の企画を行うとともに、事業全体や各取組に関する助言を県に対して行った。また、指導者や受講者の相談等への対応を行った。 ○再委託者は、初期日本語教室や養成講座の開催のための事務や実際の運営を行うとともに、教材作成委員会での検討を踏まえて学習教材を作成した。 ○指導者は、初期日本語教室でテーマに関するCan-doを作成して会話のモデルを提示し、サポーターの配置や教室の進行管理などを行うとともに、指導者養成講座においては講師として、講義を行った。 ○地域の拠点の日本語教室(市国際交流協会主催)のボランティアの希望者に、指導者養成講座を受講していただいた。 ○運営委員会は、初期日本語教室、指導者養成講座、学習教材について検討し、事業全体の成果の取りまとめを行った。
----------	---

3. 各取組の報告

日本語教育の実施【活動の名称: はじめての日本語教室】										
目的・目標	“地域における”初期日本語教室であることから、日本語のわからない外国人が、“地域の人と関係がつかれるようになること”に重点を置き、あいさつや自己紹介等ができ、日常生活の簡単な表現を理解し、話すことができるようになること(文字は、ひらがなが読める程度まで)をめざすとともに、初期日本語教室が終わってから、地域のボランティアの日本語教室につなげ、「やさしい日本語」がわかるレベルにまでなることをめざす。									
内容の詳細	○日本語がほとんど理解できない外国人が、あいさつや自己紹介等ができるようになるよう、開発した日本語学習教材を用いて会話を中心とする授業を行う。 ○各回の文法項目や語彙は、特に定めず、テーマに沿って、個別に、対話によって、受講者の使いたい語彙や表現を導入することにより、「教えたい日本語」より「使いたい日本語」を教えた。 ○この教室は、将来的に県内各地で「地域における初期日本語教室」を開催するためにモデル的に行うものであるため、実施状況をとりとまとめ、報告書を作成する。									
実施期間	平成30年10月6日～平成31年2月9日				授業時間・コマ数		1回 3時間 × 15回 = 45時間 1回 3.5時間 × 2回 = 7時間 1回 4時間 × 3回 = 12時間			
対象者	原則として、16歳以上で、日本語が全くわからないか、ほとんどわからない初期レベルの者(在留資格は問わない)				参加者		総数 30 人 (受講者 27 人、指導者・支援者等 27 人)			
カリキュラム案活用	「カリキュラム案について」の「Ⅶ 人とのかかわる」を参考に各回のトピックを決めた。プログラムの作成にあたり、「ガイドブック」の「4 日本語教育プログラムの作成手順」「5 日本語教育プログラムの具体例」を参考にした。実際の教室活動の進行は、「教材例集」の「Ⅶ 人とのかかわる」を参考にした。「日本語能力評価について」の「Ⅲ 日本語学習ポートフォリオ」を参考にし、地域の日本語教室に学習者が学んだことを引き継げるよう、受講者が毎回自己評価を行い、それを記録として残した。									
使用した教材・リソース	今回作成した学習教材(ワークシート)、スマートフォン、地域行事(交通安全教室、防災訓練)、スーパーマーケット、習字道具									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	2	0	3	4	1	0	0	0	7	1
	インド(1人)、カンボジア(8人)									
日本語教育の実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	平成30年10月6日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	8	オリエンテーション、自己紹介	前半の「自己紹介」では自分の名前や出身地などについて、後半の「私の1日」では、自分が一日に何をするかなどについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、木村エリンダ、山端玉環		
2	平成30年10月13日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	4	自己紹介2	前半の「私の家族」では家族構成などについて、後半の「住んでいる所」では住んでいる所の名前などについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環		
3	平成30年10月20日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	8	食べ物	前半の「食べ物」では自分の好きな食べ物のことなどを、後半の「料理」では自分が作る料理の作り方などを、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環		
4	平成30年10月21日(日) 11:30～15:30	4	尾西自動車学校	3	野外学習① 交通安全教室	一宮市国際交流協会が主催する「外国人交通安全教室」に参加し、自転車に乗る時のルールについて、実際に自転車に乗りながら学習した。交通安全教室終了後、学んだ言葉やその意味について確認した。	大橋充人	伊藤 クリスティーナ		
5	平成30年10月27日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	7	出身地と旅行	前半の「出身地」では自分の出身地の有名な所などについて、後半の「旅行」では自分の旅行の経験などについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環		
6	平成30年11月3日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	6	休みの日・休暇	前半の「休みの日」では休みの日にすることなどについて、後半の「行きたいところ、したいこと」ではそのことなどについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環、木村エリンダ		
7	平成30年11月4日(日) 10:00～14:00	4	向山公民館	4	野外学習② 防災訓練	一宮市国際交流協会が主催する「外国人防災教室」に参加し、防災グッズの説明を聞いたり、非常食の試食などをした。防災教室終了後、学んだ言葉やその意味について確認した。	大橋充人	伊藤 クリスティーナ		

8	平成30年11月10日 (土) 13:30～16:30	3	向山公民館	7	買い物	前半の「買い物」ではどこで買い物するかなどについて、後半の「おすすめの店」では気に入っている店などについて、グループや全員との会話を通して紹介する練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
9	平成30年11月17日 (土) 13:30～16:30	3	向山公民館	13	年中行事	前半の「季節のイベント」では自分の国や地域で行う季節のイベントなどについて、後半の「日本のイベント」では自分が経験した季節のイベントなどについて、グループや全員との会話を通して紹介する練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
10	平成30年11月24日 (土) 13:30～16:30	3	向山公民館	7	復習と成果報告会の準備	1回～9回までの内容を振り返り、次回の報告会で発表したい内容を選び、サポーターの支援を受けながら、発表の準備をした。	岡部真理子	伊藤クリスティーナ、山端玉環
11	平成30年12月1日(土) 13:00～16:30	3.5	向山公民館	8	成果報告会	発表の練習をした後で、受講者が学習成果を発表した。 その後で、食べ物を持ち寄り、持ってきた食べ物を紹介する等、受講者とサポーターとの交流を図った。	千葉月香	山端玉環、木村エリンダ
12	平成30年12月8日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	5	自己紹介	前半の「自己紹介」では自分の名前や出身地などについて、後半の「私の1日」では、自分が一日に何をするかなどについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
13	平成30年12月15日 (土) 13:30～16:30	3	向山公民館	4	私の家族、住んでいるところ	前半の「家族」では家族構成などについて、後半の「住んでいる所」では住んでいる所の名前などについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
14	平成30年12月22日 (土) 13:30～16:30	3	向山公民館	8	食べ物と料理	前半の「食べ物」では自分の好きな食べ物のことなどを、後半の「料理」では自分が作る料理の作り方などを、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	岡部真理子	伊藤クリスティーナ、山端玉環
15	平成31年1月5日(土) 13:30～17:00	3.5	向山公民館	5	年中行事	前半の「年中行事」では自分の国や地域の行事などについて、後半の「年中行事の思い出」では自分が経験した行事などについて、グループや全員との会話を通して紹介する練習をした。最後に、全員で書き初めにチャレンジした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
16	平成31年1月12日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	7	出身地と旅行	前半の「出身地」では自分の出身地の有名な所などについて、後半の「旅行」では自分の旅行の経験などについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
17	平成31年1月19日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	9	休みの日、行きたいところ	前半の「休みの日」では休みの日にすることなどについて、後半の「行きたいところ、したいこと」ではそのことなどについて、グループや全員との会話を通して伝える練習をした。	岡部 真理子	伊藤クリスティーナ、山端玉環
18	平成31年1月26日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	3	買い物、おすすめの店	前半の「買い物」ではどこで買い物するかなどについて、後半の「お勧めの店」では気に入っている店などについて、グループや全員との会話を通して紹介する練習をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
19	平成31年2月2日(土) 13:30～16:30	3	向山公民館	3	復習と成果報告会の準備	12回～18回までの内容を振り返り、次回の報告会で発表したい内容を2つ選び、サポーターの支援を受けながら、発表の準備をした。	千葉月香	伊藤クリスティーナ、山端玉環
20	平成31年2月9日(土) 13:30～17:30	4	一宮スポーツ文化センター	7	成果報告会	発表の練習をした後で、受講者、サポーター等が持ち寄った食べ物を囲み、受講者が学習成果を発表した。全員でゲームを行う等、受講者とサポーター等との交流を図った。	千葉月香	山端玉環

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第1回 平成30年10月6日】

この教室は、学習教材(ワークシート)を活用しながら実施する。

この日は、初回だったので、前半が「自己紹介」、後半が「私の1日」というトピックを設定した。

前半の自己紹介では、最初に次の①自分の名前、出身地を伝える、②他の人の自己紹介を聞いて理解する、③はじめて会った人と自己紹介して、お互いのことを知ることができるかどうかについて、ワークシートのCan-do-statementsで自己評価を行った。

次に、話すための準備として、ワークシートに沿って、名前、国等話す内容をサークシートに記入した。

その後、テーブル内の人たちと自己紹介をして、知った言葉などをワークシートにメモをしていった。(写真左側)

次に、テーブル内で練習した伝えたいことを、受講者やサポーターがペアになって一人一人に声を掛け合いながら話す練習を繰り返し行った。(写真右側)

最後に、受講者が活動を通して覚えたいと思った言葉をワークシートに記入した。

後半の、「私の1日」についても、同じ流れで自分が話したいことを繰り返し話す練習を行い、定着させていった。

後半の最後に、受講者は、この日、日本語教室で勉強した感想を記入した。



○取組事例②

【第20回 平成31年2月9日】

前回、これまでの学習した来たテーマの中から話したい内容を選び、発表する資料を作成したり、話すための内容の整理を行った。

それを受けて、今回の教室では、前回の教室で準備した発表の内容を、まず、サポーター一人一人に対して話し練習を行った。(写真左側)

その後、準備してきた内容を、受講者一人ずつが順番に全員の前で発表し、これまでの練習の成果を披露した。(写真右)

最初はほとんど日本語を話せなかった人が、自分から話そうとする姿勢がみられたり、全員の前でしっかり話せるようになったり、学習者の成長を感じることができた。



(2) 目標の達成状況・成果

・来日して間がなく、最初は意思疎通が難しかったが、初期日本語教室に通い続け、少しずつ話しができるようになった。

・前半はあまり話せなかった人が、後半にも同じテーマを繰り返したことで、自信を持ち、表情も明るくなって、自分からいろいろと話すようになった。

・前半と後半の各最終回に、受講者にアンケートを実施したところ、「前より日本語が上手になったと思うか」について、アンケート回答者(前半8名、後半7名)の内、13名が「まあまあ上手になった」または「上手になった」と回答した。また、「前よりも日本での生活ができるようになったと思うか」についても、13名が「少しできるようになったと思う」または「できるようになったと思う」と回答した。以上のことから、教室の目標である「地域の人と関係がつけられるようになる」ための、自信が持てるようになったのではないかと考えられる。

・受講後の学習者が、地域の日本語教室に受け入れられ、引き続き日本語学習を継続できることになり、本教室の目標の一つが達成できたと考えられる。

(3) 今後の改善点について

・1回の教室を3時間で設定したが、受講者の集中力が続かなかった時があったので、1回当りの時間数を見直す。

・サポーターから、教室が終わった後に振り返りが必要ではないかという意見があったので、振り返りを行えるようにしたい。

・サポーターが学習者の状況を把握できるように、カルテを作るなど情報共有の必要があった。

・外国人サポーターのおかげで、円滑な教室運営が図られ、効果的であったと考えられるが、その役割を明確にしないまま事業を実施してしまったので、明確にする必要がある。

・県を含め、関係者が対話型の日本語教育を理解できていないまま教室を始めてしまったが、あらかじめ関係者が理解するための場を設ける必要があった。

・次年度以降は今年度開発した教材を使用、または、改良を加え、対話型の教室を他地域でも展開していく。

日本語教育を行う人材の養成・研修の実施【活動の名称:初期日本語教育向け指導者養成講座】										
目的・目標	初期レベルの学習者に対して「地域における初期日本語教育」ができるような人材を養成する。									
内容の詳細	○「地域における初期日本語教育」を行えるようにするため、日本語教育の専門性と地域の専門性の習得ができるようにした。 ○座学だけでなく、実際に教えることができるよう、別途開催する「地域における初期日本語教室」にサポーターとして参加し、実践も行った。									
実施期間	平成30年9月15日～平成31年1月19日				授業時間・コマ数		1回 5時間×6回＝30時間			
対象者	地域の日本語教室において初期日本語教育を行う意志のある者				参加者		総数28人(受講者23人、指導者・支援者等5人)			
カリキュラム案活用	初期日本語教室にサポーターとしての実践を通して「カリキュラム案について」と「教材例集」の「Ⅶ 人とのかかわる」を中心にした日本語教室であることを学習してもらった。また、「日本語能力評価について」の「Ⅲ 日本語学習ポートフォリオ」を参考にして作成された、日本語教室の学習者が毎回行う自己評価を、学習者にやり方を教えることにより、活用の仕方を実践を通して学んでもらった。									
使用した教材・リソース	講師が使用するレジュメ、パワーポイント、初期日本語教室での実践、今回作成した学習教材									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
										23人
養成・研修の実施内容										
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名	
1	平成30年9月15日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	23	事業の概要、地域の状況を理解する。初期日本語教育のための基礎知識を習得する。	①事業の概要説明、②一宮市における外国人の状況について説明及び外国人住民による発表、③「はじめての日本語」基礎知識について学習		磯村美保子	安藤嘉浩、伊藤クリスティーナ、木村エリンダ、山端玉環	
2	平成30年9月22日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	19	地域における日本語教育について理解する	地域における日本語教育について講義及びワークショップの実施		米勢治子		
3	平成30年9月29日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	22	対話型の初期日本語教室について理解する	初期日本語教室(対話型)について講義及びワークショップの実施		千葉月香		
4	平成30年11月24日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	16	初期日本語教育について理解を深める	初期日本語教室での実地研修を踏まえたワークショップの実施①		千葉月香		
5	平成30年12月22日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	14	初期日本語教育について理解を深める	初期日本語教室での実地研修を踏まえたワークショップの実施②		千葉月香		
6	平成31年1月19日(土) 10:00～16:00	5	向山公民館	15	これまでの学習についてふりかえる	①愛知県の日本語教育の取り組みについて説明、②学習者の悩み、日本習得でのつまづきへの理解を深めるための講義、③講座のまとめ		千葉月香、伊藤クリスティーナ	大久保園子	

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第4回 平成30年11月24日】

・第3回の養成講座後から、受講者に初期日本語教室の見学やサポーターとして参加をしていただいた。第4回の講座は、受講者が実際に初期日本語教室に参加後、初めての養成講座であった。そのため、受講者に参加してどう思ったか、参加前に不安だったこと、学習者の印象の変化などをまず確認し、その後、初期日本語教室に参加したことについてふりかえりを行った。

・ふりかえりでは、①自分のことについて、サポーターとして自分にできたことや困ったことなどを整理した。次に、②学習者のことについて、いつ、何を学んだか、学習者が満足できたのはどんな様子のときかを考えた。さらに、③サポーターのことについて、サポーター同士で協力できたこと、サポーター同士のやりとりが学習者どう映るかなどを考えた。これらの考えたことをグループごとに意見交換を行ってまとめ、他のグループとも意見交換を行い、皆の考えを共有した。



○取組事例②

【第6回 平成31年1月19日】

講座の受講者から、この事業を愛知県が実施する背景などを知りたいという意見があったため、まず、愛知県の日本語教育の取り組みについて説明を行った。

次に、学習者の悩みや日本語を習得するうえでのつまずきについて講義を行い、受講者は日本語学習者に対する理解を深めた。

最後に講座のまとめとして、養成講座や初期日本語教室に参加して学んだこと、これから日本語サポーターとして教室に参加しようと思っている人へのアドバイス、養成講座を受講して収穫こと、もっと学びたいと思ったことについてグループごとに話し合いを行った。また、その内容をまとめ、他のグループとの意見交換を行って全員で共有を図った。



(2) 目標の達成状況・成果

・最終日、受講者にアンケートを実施した。

・養成講座最終日の参加者15名中、講座全体について、8名が「大変有意義だった」、6名が「有意義だった」と回答。また、「この講座を受けて、地域で初期日本語教育に取り組んでみたいと思うか」という問いについては、3名が「取り組んでみたいと思う」、9名が「できれば取り組んでみたいと思う」という回答があった。

以上のアンケート結果から、対話型による初期日本語教育について理解が得られたと考えられる。

・経験の有無を問わず、事業目的に沿った人材を多数開拓し、養成することができた。

・講座だけでなく、初期日本語教室において、サポーター役をもらい、実践的に教え方を学ぶ機会も設けた(そのうち2名は指導者役も体験)。こうしたことにより、「地域における初期日本語教育」のためのスキルを多くの受講者が身につけ、地域の日本語教室へとつなげられたと考えられる。

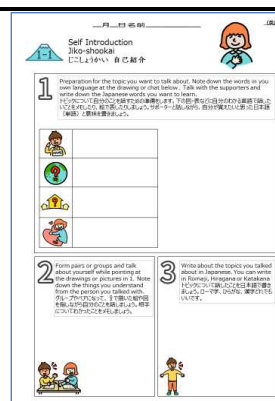
(3) 今後の改善点について

・養成講座を行うことだけを考えていたため、修了後に、受講者が学んだことを活かせる場を設定することができなかった。ただし、受講者も初期日本語教室に継続して関わっていきたい気持ちが強く、そのような場が設定できないか検討中である。

・サポーターとして実践することで、「対話型」が理解できるようになるため、講義時間を減らし、実践を踏まえたワークショップを中心にしたカリキュラムに再編する。

・養成対象が指導者かサポーターかで教える内容が異なるので、まず、サポーターを養成し、その後に指導者を養成するような、段階を踏まえた講座にする。

日本語教育のための学習教材の作成【教材の名称：地域における初期日本語教育モデル事業 はじめての日本語教室】			
目的・目標	日本語のわからない外国人が、地域の人と関係がつけられるようになることに重点を置き、あいさつや自己紹介等ができ、日常生活の簡単な表現を理解し、話すことが、対話を通してできるようになるための教材を作成する。		
内容の詳細	○学習教材作成委員会を開催しながら、以下のとおり、教材を作成した。 ・8月2日に第1回学習教材作成委員会を開催し、再委託者が作成した教材案をもとに改善点について話し合いを行った。 ・9月18日に第2回学習教材作成委員会を開催し、第1回委員会が出された意見を踏まえて修正した教材案について、更なる改善点について話し合った。その後、修正を加えて、10月からの初期日本語教室で使用する教材案を完成させた。 ・10月から教材案を初期日本語教室で活用しながら見直しを行い、繰り返しブラッシュアップを行った。 ・2月4日に第3回目の委員会を開催し、実際に使いながら見直しをしてきた教材の最終版を確認し、完成させた。		
実施期間	平成30年8月2日～平成31年2月28日	作成教材の 想定授業時間	1回 3時間 × 20回 = 60 時間
対象者	日本語学習者用。原則として、16歳以上で、日本語が全くわからないか、ほとんどわからない初期レベルの者。母語は限定しない。	教材の頁数	150 ページ
カリキュラム案活用	「カリキュラム案について」の「Ⅶ 人とかかわる」を参考に教材のトピックを決めた。「ガイドブック」の「4 日本語教育プログラムの作成手順」「4 具体的な日本語教育プログラムの作成」、「教材例集」の「Ⅶ 人とかかわる」を参考にして教材の構成を検討した。「日本語指導力評価について」の日本語指導力ポートフォリオを教材の見直しを行う上で活用した。		
事業終了後の教材活用	・県や一宮市のWEBに掲載し、地域の日本語教室での活用を働きかける。 ・次年度以降に県で実施する初期日本語教育事業において活用する。		
成果物のリンク先	https://www.pref.aichi.jp/syakaikatsudo/tabunka.html http://www.city.ichinomiya.aichi.jp/iaa/1012189.html		



4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

愛知県においては、平成25年度に策定した「愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方」において、「地域における日本語教室」を、「ことばや文化、国籍などのちがいがいにかかわらず、すべての県民が誰でも参加でき、日本語を使ってコミュニケーションすることによって日本語の力を身につける」場と位置付けている。このような教育の場では、ボランティアと外国人県民が対等な立場で相互理解を深めるためのテーマや地域に密着したテーマなどを学ぶことで、日本語や日本社会の知識を身につけたり互いの文化的背景や考え方を理解したりすることができる。しかしながら、日本語が全くわからないか、ほとんどわからない外国人県民と最初からこうした場をボランティアがつくることは困難であり、地域の日本語教室が本来の役割を果たすためには、日本語教育の専門的な知識とノウハウを持った専門家が初期日本語教育を行い、ボランティアがコミュニケーションをとれる程度にまで日本語力を身につけてもらうことが必要である。また、専門家による初期日本語教育を受けることによって、外国人県民は、簡単な日本語でコミュニケーションする方法を身につけることができるため、その後の日本語学習に効果的である。ボランティアにとっては外国人県民と日本語でコミュニケーションが容易に取れるようになるため、双方が日本語教室に参加しやすくなる。そこで、愛知県として、専門家の協力を得て、日本語をほとんど話せない外国人県民を地域のボランティアによる日本語教室へ橋渡しするための初期日本語教育の愛知モデル（あいち初期日本語教育プログラム）を構築することにより、外国人県民を地域社会の一員としてしっかり受け入れ、社会から排除されないための社会インフラ整備を目指す。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

・初期日本語教室では、日本語がほとんどわからない外国人は、最初は意思疎通が難しく、表情も硬かったが、教室に通い続けるうちに、教室の雰囲気や日本語で自分のことを話すことに慣れていき、積極的に参加するようになっていった。また、アンケートの結果からも、この対話型の日本語教室の評価は高く、日本語の継続学習にも意欲が感じられた。対話型で生きた日本語を学習することは、外国人が日本語でコミュニケーションを取りながら地域社会で生活するための自信に繋がるものになると考えられる。

・地域の日本語教室のボランティアがサポーターとして参加したことにより、地域の日本語教室にも通う学習者も現れ、初期日本語教室と地域の日本語教室との橋渡しができた。また、サポーターから使用した教材を地域の日本語教室でも活用したいと申し出があった。

・学習教材は、学習者の使用する様子を見ながら改善を図っていったので、完成度の高いものとなった。学習教材を活用して「対話型日本語教育」が行えるよう、マニュアルも作成したことにより、「地域における初期日本語教育」を広めるベースができたと考えられる。

(3) 標準的なカリキュラム案の地域での活用について

・教室のカリキュラム作成および教材開発の際に標準的なカリキュラム案の生活上の行為例を参考にした。生活上の行為例の中から、参加者同士が相互の生活習慣への理解、人間関係の構築がしやすいと考えられる、身近で具体的なものを対話活動のトピックとして使用した。その結果、参加者同士が互いのことを知りあうことを促進するのはもちろん、外国人参加者が日本の生活習慣や居住する地域の文化や住環境に関心をもつきっかけをつくることのできた。これを通して、教室活動での対話が活発になり、また、教室外でも参加者同士が交流するきっかけにもなった。

・カリキュラム案の「Ⅷ 人とかかわる」にも少し多くのテーマがあるとより活動に活かせるのではないだろうか。

・「教材例集」の活動の流れを参考に、実際の教室活動の進行を行ったので、初期日本語教室の活動がスムーズに行われた。養成講座の受講者が初期日本語教室の進行体験もしたので、地域の日本語教室で経験を活かすことができると考えられる。

・教材はCan-do statementsを軸に開発し、教室での学習活動が他の日本語教室のコーディネーターや学習支援者にもわかりやすくするように工夫し、本教室で使用し、記入した教材自体がポートフォリオとしての機能をもつように考慮して開発した。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

・コーディネーター：県に対して事業実施に関する助言や提案、今後の展開についての助言を行った。また、学習教材作成に関して、再委託者、指導者へのアドバイス、一宮市への事業継続の働きかけを行った。

・再委託者：初期日本語教室の指導者の確保、カリキュラム作成、初期日本語教室・指導者養成講座の運営、受講者のケア、継続して受講しやすい雰囲気作りを行った。また、指導者・コーディネーターと協力して学習教材を作成した。

・指導者：カリキュラムの作成、初期日本語教室の指導者、指導者養成講座での講師を担当した。

・外国人住民コーディネーター：地域の外国人住民に初期日本語教室の参加を働きかけた。また、初期日本語教室の受講者に出席を働きかけたり、教室内での受講者のケアを行った。

・一宮市国際交流協会：会場の確保に協力をした。また、受講者の募集では、県と一緒にハローワークや地元企業にチラシ配布の協力依頼を行った。

・一宮市役所：窓口で外国人住民に初期日本語教室の受講を案内し、受講者の募集に協力した。

・運営委員会：初期日本語教室や指導者養成講座の内容について助言を行い、カリキュラムに反映させた。事業の成果や評価について検討し、次年度以降の取り組みの方向性について県に提案した。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等につ

【参加者への周知・広報】

・県：記者発表を行い、市町村、関係機関・団体へチラシを配布した。また、記者発表の結果、テレビのニュースに取り上げられ、指導者養成講座の応募者の増加に繋がった。

・一宮市役所：県と共に、地元ハローワークや地元企業にチラシ配布の協力依頼を行った。窓口で外国人住民に初期日本語教室の受講を案内した。その結果、数名が初期日本語教室に参加した。市役所窓口での案内は受講に繋がりが効果があった。

・再委託者：外国人コミュニティに初期日本語教室の受講を働きかけた。

・外国人住民コーディネーター：地域の外国人住民に初期日本語教室の受講を働きかけた。

・一宮市国際交流協会：協会が主催するイベントでチラシを配布した。

【事業成果の地域への発信】

・県及び一宮市役所のWEBページで教材や事業の成果を公表したり、県が行う会議等で成果を報告する予定である。

(6) 改善点、今後の課題について

・対話型の初期日本語教室は、日本語が全くわからないか、ほとんどわからない初期レベルの生活者に対しては、非常に効果的な方法であることがわかった。一方で、対話型の初期日本語教室で教える内容や表現は、画一的ではなく、学習者の伝えたいことに応じて異なることから、教え方が難しい。また、教室型の日本語教室のイメージを持っている人が、その有効性を理解するには時間がかかる。そのために、学習教材を使用するためのマニュアルを作成し、次年度の養成講座で活用する予定である。教室型の日本語教育のイメージを持っている人に、対話型の考え方を、どうわかりやすく伝え、理解してもらえかが課題である。

・当該地域における初期日本語教室を継続して開催することが難しい状況にあり、初期日本語教室での学習者が必要な外国人や、活動の場を希望する養成講座の修了者のために、地域コミュニティの拠点や地元企業において、対話型の初期日本語教室の開催について働きかけを行う必要がある。

・地域において、初期日本語教室が実施できるよう、来年度は初期日本語教室を運営するための指導者向けのマニュアルを作成する予定である。

・対話型の初期日本語教室を理解し、教室活動を実施できる人材を増やすため、次年度以降も他地域で同様の取り組みを行う必要がある。

(7) その他参考資料

・ちらし（はじめての日本語教室（前半・後半）、初期日本語教育向け指導者養成講座）

・『愛知県多文化共生社会に向けた地域における日本語教育推進のあり方』